

# 囚われのエンゲージ

*Saya & Yosbiki*

---

水島忍

*Shinobu Mizubima*

ernity



エタニティ文庫

1

「ねえ、お姉ちゃん！起きて！」  
妹の梨花りかの声で、吉住沙耶よしみさやは眠い目をなんとか開けた。

今日は休日だ。できれば遅くまで寝ていたいが、そうはいかない。大手スーパー『ムラサキ堂』に勤める沙耶にとっては休日だが、小学校に通う梨花にとっては単なる平日だからだ。

「お姉ちゃん、朝だよ！」

梨花は朝から元気いっぱいで、にこにこしている。時計を見ると、まだ目覚ましの鳴る時間ではない。梨花にしてみれば、目覚ましより早く起きたのだから、姉も起こしてあげようと思ったのだろう。

「ありがとう……。おはよう、梨花」

「うん。おはよう、お姉ちゃん！」

正直なところ、沙耶はぎりぎりまで眠っていたかったのだが、梨花にはそんなことは

言えない。我が子同然に可愛がつている妹を嫌な気持ちにさせたくはなかった。沙耶は布団から起き上がり、身支度みじたくを整えようとした。梨花はもうとつくに着替えて、顔も洗っている。まったく、元氣すぎるくらいに元氣だ。

二十二歳の沙耶は二年前に母を亡くしてから、梨花と二人でこのアパートで暮らしている。父はもうずっと前に家を出ていき、行方がわからない。たまにふらりと帰ってくることもあったが、すぐにまたどこかに行ってしまうから、いないのと同じだ。本当に二人きりの家族で、だからこそ、沙耶は梨花をととても大事にしていた。

「ねえ、お姉ちゃん、あたしの体操服はどこ？」

梨花はタンスの引き出しを探っている。

「袋に入れて、ランドセルの横に置いてあるわよ」

「あー、ホント。ありがとう！でも、お姉ちゃんは忙しいんだし、こんなことしなくていいんだよ。四年生なんだから、自分でちゃんとやれるもん」

実はけっこう忘れん坊で、危なっかしいところもあるのだが、本人はやる気満々だ。

確かに、沙耶は手を出しすぎるところがあるかもしれない。自分が母代わりだと思つと、すぐになんでもしてあげたくなってしまふのだ。

「そうだね。梨花はもうなんだってできるもんね」

「うん！あたし、洗濯機、回しといてあげる」

ショートカットの髪を揺らして、梨花は洗面所のほうへと駆けていった。その足音に、沙耶は顔をしかめる。古いアパートだが、たとえそうでなかったとしても、ここは二階だ。下に響くに決まっている。

「走らないで！」

「あ、ごめんさい」

元氣なのはいいが、やはり少し注意散漫なところがある。とはいえ、沙耶にとつては、梨花は可愛い妹だった。

今までつらいこともたくさんあったが、沙耶は梨花がいてくれて、本当によかったと思う。彼女がいてくれたから、母亡き後も、自分は独りぼっちにならずに済んだのだ。

わたしには恋人もいないし……

沙耶はそう考えて、一人で苦笑した。今まで恋人なんていたことは一度もない。おとなしい性格のため、学校ではまったく目立たなかった。一応、好きな男の子はいたが、告白どころか話しかけることすらできずに、片想いのまま卒業したのだ。

高校を卒業した後、ムラサキ堂に就職し、そのすぐ後で母が病に倒れた。それから今に至るまで、多忙の日々で、たとえ誰かに誘われたとしてもデートなんてできなかつた。もつとも、誰にも誘われたことはないのだが。

沙耶は身支度を済ませると長い髪をうしろでひとつにくくつた。それから、軽い朝食

を作る。といつても、トーストを食べるつもりだったから、自分と梨花の分の目玉焼きを焼くだけだ。それに昨夜の夕食用に作ったポテトサラダの残りもカップスープを用意すればいい。

フライパンに卵を二個落としたときに、梨花がキッチンへやってくる。

「あたし、カップスープ作るね。お姉ちゃんは？」

梨花は本当に姉想いのいい子だ。沙耶はにっこり笑った。

「わたしはコーヒーがいいな」

「任せといて」

梨花は戸棚からカップスープの素やインスタントコーヒーの瓶を取り出して、そのうしろ姿をちらりと見て、沙耶はふと顔を曇らせた。妹が大事であればあるほど、ときどき、不安が過ぎる。自分になにかあったら、彼女はとうなるだろう。

実際、沙耶は一カ月ほど前に、事故に遭った。いや、正確には遭いかけた。仕事から帰る途中、自転車に乗っていたのだが、スピードを出した車に追い抜かれ、接触しそうになったのだ。風圧で歩道側に倒れ、投げ出された。ちよつとした打撲と擦り傷だけだったものの、頭を打ったために一時、意識を失い、通行人が呼んでくれた救急車で病院に運ばれる羽目になった。

病院で意識を取り戻した沙耶は、すぐに家に帰ろうとした。だが、脳震盪のうしんどうを起こして

いたため、病院に足止めされたのだ。安静にしていなければならないと言われて、パニックおちいに陥りかけた。梨花が一人きりで家にいるのに……と。

看護師になだめられた沙耶は、結局、許可を取って、アパートの隣人に電話をかけた。梨花の友達のも親でもある彼女に。事情を話したら、梨花を一晚預かってくれることになり、ほっとした。自分が一晚で家に帰れることはわかっていただけからだ。

もし、重傷を負っていたら……。いや、それより、自分が死んでしまったら……

梨花は一人で残されることになる。行き先は施設しかない。

近い親族はいないに等しい。少なくとも、身寄りのない梨花の面倒を十年も見てくれる人は誰もいないのだ。もちろん、父はどこにいるかわからないし、わかったところで、まるつきり当てにならない。

だから、沙耶はある計画を立てていた。それが成功すれば、少しは頼れる人ができるかもしれない。

人の命なんてはかないものだ。母が亡くなったときに、沙耶はそう感じた。母はまだ四十二歳だった。健康なら、あと四十年は生きていられるはずだったのに。

そう考えたら、自分だって、いつまで生きていられるかわからない。病気になるかもしれないし、事故に遭うかもしれない。自転車にはもう乗っていないが、それでも危険はあちこちにある。運が悪ければ、歩いていても事故に遭うのだ。

だから、沙耶は梨花のために万全の準備をしておきたかった。彼女が成人するまでに不自由なく、安全に暮らせるように。

「あたし、パンを焼いてあげるね」

カップスープとインスタントコーヒーをつくった梨花は、トースターを茶の間に持っていく、食パンを二枚入れた。沙耶は目玉焼きを皿に移しながら、梨花を見て微笑んだ。梨花はとても素直に育っている。物心ついたときから父親が家にいないことにも、ほとんど不満を洩らさない。自分は大した姉ではないし、充分なこととしてあげられないのに。

沙耶はポテトサラダとハムを皿に盛りつけ、それを茶の間のテーブルに運んだ。やがて、トーストが焼け、梨花は手を合わせた。

「いただきます！」

にこにこ朝食を頬張る梨花の姿を見て、沙耶は決心した。

彼女のために、どんな嫌な思いをしようとも、必ず計画を成功させよう。

沙耶は梨花が学校に出かけた後、洗濯や掃除を済ませてから、アパートを出た。

今日は仕事ではないが、大事な人と会うので、きちんとスーツを着てみた。紺色のスーツで、沙耶は自分がこれから就職活動でもするような気分になった。

仕事のための面接なら、まだ気が楽だ。これから沙耶は会ったこともない母方の祖父に、孫だと名乗りに行くのだ。

祖母は早くに亡くなっていて、一人娘の母は祖父に育てられたという。ところが、祖父は両親の結婚に反対だった。いや、反対などという生易しいものではない。夢見る芸術家だった父が挨拶に来たとき、文字どおり罵倒したのだ。結局、そのことがきっかけになり、母は父と駆け落ちして、勝手に入籍した。だが、祖父は許してくれず、母に二度と帰ってくるなと言いつつ渡しすらしい。

沙耶は子供の頃、自分に母方の祖父母がいないことに疑問を持ち、それについて何度か母に尋ねていた。父方の祖父母が亡くなっていることはもう知っていたからだ。小さいときには、はぐらかされたが、中学に入った頃にやっと本当のことを話してもらえた。母は二度と帰ってくるなと言われたとおり、それきり自分の父親には会わなかった。沙耶は母が病に倒れたとき、何度も実家に連絡しようかと尋ねたのだが、そのたびに、母は拒絶した。彼女は自分の父をとてもし恐れていたのだ。母がそれほど嫌がっているのに、無理に会わせることはないと思ひ、沙耶は行動に移さなかった。

しかし、今となつては、あのと時知らせるべきだったと思う。母の命があまり長くないことを知りながらも、沙耶は母が死ぬとは、どうしても考えられなかったのだ。あのと時、母が死ぬことをちゃんと受け止めていたら、沙耶は連絡を入れていたはずだ。

けれども、沙耶がそうする前に、母は死んでしまった。自分の父親と和解することもなく、死んでしまったのだ。

すべてはわたしのせい……

わかつている。現実をちゃんと見るべきだったのに、それができなかった。今さら、自分がこの祖父に会いにいつて、歓迎されるとはとも思えない。長い年月を経て、祖父の心はもう母を許しているかもしれない。だとしたら、なおさら沙耶が母の死の際に、実家に一言も連絡を入れなかったことを、祖父が許してくれるとは思えなかった。それでも、沙耶が頼るべきは祖父しかない。自分の身になにかあったとき、ほかに、梨花のことを頼める相手はいないのだ。

沙耶は母が残した古いアドレス帳を握り締めた。そこには、実家の住所と電話番号が書かれている。電話してみたものの、そのときは誰も出なかった。母の実家が今はどうなっているのか、知るのが怖かったが、今日は意を決して、訪ねてみることにした。

電車を乗り継ぎ、沙耶は住所の最寄り駅で降りた。そして、携帯電話に地図を表示する。どこを向いても、お屋敷のような大きな家が目に入ることに、少なからずショックを受けた。

母から祖父のことはあまり聞かされていないが、どうやら母はお金持ちのお嬢様だったらしい。住所を見て、ここが高級住宅街であることはわかっていたのだが、改めて、

ここは自分達の住む世界とは違う場所なのだということがひしひしと感じられた。

ひよっとしたら、祖父に追い返されてしまうかもしれない。

そんな考えが頭に浮かんだが、ここで帰るわけにはいかない。妹のために、そして、母のためにも祖父に会いたかった。

実を言えば、梨花は異母妹なので、母の父親とはまったく血の繋がりはない。けれども、沙耶が頼るべき相手は今や祖父しかいなかった。

「ここだわ……」

沙耶は地図を見、それから表札を確かめた。

表札の名は宮瀬。母の旧姓だった。

大きな門と門扉の向こうに道があり、その向こうに美しい洋風の屋敷が見えた。もちろんかなり大きい。ドキドキしながら、沙耶は門扉につけてあるインターフォンを押そうとした。だが、後ろから車の音が聞こえて、振り返った。

黒塗りの高級車だ。沙耶は思わず車に乗っているのは誰なのか、視線を走らせた。祖父がその中にもいるかもしれないと思ったのだ。

車の後部座席のパワーウィンドウが下がる。残念ながら、老人ではなく、三十代くらいの男が顔を見せる。

男の人なのに綺麗な人……

驚くほど整った容貌の男に、沙耶は目を瞠みはった。男らしいしつかりとした眉に、印象的な切れ長の目、それからすっと通った鼻筋、引き締まった唇の形がとてもいい。なんだかドキドキしてしまう。そんな場合ではないのに。

「うちに用事のある方ですか？」

優しい声で話しかけられて、沙耶はまごついた。この人は誰なのだろう。自分と血縁関係にあるのだろうか。わからないながらも、自己紹介をしなくてはならないと思った。「あの……わたし、吉住沙耶と申します」

そう名乗った途端、彼の表情が一変した。

眉がぎゅつと寄せられ、眼差しは鋭くなった。睨にらみつけられている気がして、沙耶は驚いた。初対面なのだから、こんなふう(とげとげ)に睨まれるような覚えはない。

「君は金目当てで、やってきたのか？」

彼の声は急に刺々とげとげしいものとなっていた。

「えっ……あの……」

「とにかく、話だけは聞いてやろう。一緒に入ってくるがいい」

パワーウィンドウが上がったかと思うと、門扉もんびが自動的に開いていく。そして、車は敷地内へと入っていった。沙耶はわけがわからず、呆然と車を見送っていたが、とにかく入ってこいと言われたのだ。あんな乱暴な言い方をされて、彼とはもうこれ以上、話

したくなかったが、とにかく祖父と会わなくてはならない。沙耶は決心して、門の中へと足を踏み入れた。

それにしても、彼は一体、誰なのかしら……

名乗っただけで、彼はわたしが誰なのかわかったみたいだった。でも、金目当てで、どういふことなの？

母の実家はお金持ちかもしれないが、沙耶には関係のないことだ。働いているのだし、大金など必要としていない。

彼はきつと勘違いしているのよ。それとも、他の人と間違えたのかもしれない。

あんなに格好いい男性とせっかく会ったのに、睨にらまれたくはない。できれば笑ったところが見てみたい。

沙耶はそんな呑気のんきなことを考えながら、屋敷の玄関へと向かった。

## 2

沙耶が通されたのは、立派な応接間だった。

革張りの大きなソファに腰を下ろして、思わず辺りを見回す。足元はふかふかの絨毯

で、目の前のどつしりとしたテーブルはきつと大理石かなにかなのだろう。白くてつるつるしていて、石の模様がある。沙耶は触ってみて、その冷たさを感じた。

折上げ天井にはシャンデリアがぶら下がっていて、サイドボードには値段が高そうな洋酒やピカピカに磨かれたグラスが並んでいる。一人でここに待たされて、落ち着かない気分です座っていると、この家のお手伝いらしき女性がお茶を持ってきてくれた。

「あの……わたし、宮瀬昭一さんに会いにきたんですけど」

今頃、用件を言うのは間抜けかもしれない。しかし、玄関に着くと、すぐここに通されたのだった。

女性は動揺したような表情になったが、なんとか笑みを浮かべた。

「申し訳ありませんが、しばらくお待ちください」

どういふことだろう。祖父は病氣かなにかなのだろうか。あの男性はそもそも祖父のなんなのだろう。

女性が出ていくと、しばらくしてあの車の中にいた男性が応接間へと入ってきた。

車の中ではわからなかったが、彼は身長が高かった。均整のとれたスマートな身体がダークスーツに包まれている。

沙耶は立ち上がり、彼に頭を下げたが、彼のほうは無言のまま沙耶の前にどっかりと腰を下ろした。限りなく無作法だ。仕方なく沙耶も腰を下ろしたが、居心地が悪い。だ

いたい沙耶は名乗ったが、彼は名乗りもしない。じつと沙耶の顔を睨みつけ、やっと口を開いた。

「君が吉住沙耶か……」

改めてそう言った口調は苦々しげだった。

「わたしのことをご存知なのですか？」

「もちろんだ。私は宮瀬佳貴。君のお祖父さんの養子となった男だ。宮瀬ホールディングスのCEOでもある」

沙耶は目をしばたいたいて、彼を見つめた。養子ということは、一応、叔父と姪という関係になるのだ。

「わたしの叔父さん……？」

「戸籍上はね。しかし、血の繋がりはない。そもそも、私は君に叔父さんなどと呼ばれたくない。君のような卑劣な女には！」

沙耶はいきなり罵声を浴びせられ、固まってしまった。

初対面なのに、どうしてこんなことを言われなきゃならないの？

よりにもよって、卑劣だなんて罵倒されるとは思わなかった。生まれてこのかた一度だって、沙耶は道を踏み外したことがない。子供の頃にイタズラをしたことや嘘をついたことがないとは言わないが、自分の記憶の中で悪いことといったら、その辺りのこと



だ。自分でも馬鹿みたいに真面目だと思うことがある。それくらい、沙耶は真つ当な人生を歩んできたのに、よく知りもしない相手から、非難される理由はないと思った。

「わたしは……」

反論しかけたのに、佳貴からはさらなる罵声を浴びせかけられた。

「どうして、君はお祖父さんが亡くなつて一週間もしてから、このこやつてきたんだ？ どうせ遺産目当てなんだろう？」

沙耶はその一言に驚いた。

「それでは……祖父は亡くなつたんですか？」

佳貴の目つきはますます険悪なものとなった。

「今さら驚くことではないだろう？ 危険な状態だと何度も連絡したはずだ」

「そんな……！ わたし、そんな連絡なんて一度も受けたことはありません！」

たった一人の祖父だ。長くはないと知っていたら、絶対に駆けつけていたに決まっている。

しかし、どういうことだろう。彼は連絡したという。けれども、わたしは連絡なんて受けてない。

「しらばくくれるな。君が金にしか興味がないことは、よくわかっている。今日だって、遺産目当てでなければ、わざわざここには訪ねてきてないだろう」

「でも、本当に……」

「そういうえば、君はお母さんが亡くなったときも、お祖父さんに知らせなかつたな。後から聞いて、養父は嘆き悲しんでいたよ。どうして、君はそんな情がないんだ？」

沙耶はずつと気にしていたことを指摘されて、愕然がくぜんとした。すでに祖父は母が亡くなっていたことを知っていたのだ。

でも、なぜ……？

一体、誰が祖父に教えたのだろう。自分以外にその事実を伝える人間はいなかつたはずだ。ひよつとしたら、祖父は母のことを調べたのかもしれない。お金持ちなら、探偵に探らせるのは簡単だろう。

佳貴は祖父が危険な状態だと知らせたという。だが、沙耶はそんな知らせなど受け取っていない。つまり、その行き違いは、きっと探偵が原因なのだ。探偵が間違つた住所や電話番号を沙耶のものだと、祖父に報告したのかもしれない。

「わたし……知らせるべきでした。わたしが悪いんです」

「そうだ。なにかも君が悪い。お祖父さんは君のお母さんや君に許してもらいたかつたのに……。君はそのチャンスを与えず、金だけを要求しにやってきたんだな？」

「いいえ！ わたし、お金なんて……」

「金なんていらないと？ 君が一切、なにもいらないと言うのなら、信じてやってもい

いが」

皮肉めいた口調で尋ねられて、沙耶は黙り込んだ。

自分は働いているから、必要な分は稼いでいる。決して金持ちではないが、少しは貯金もある。しかし、梨花のためには、もつと蓄えが必要だった。梨花は成績がいいが、私立の学校には行けない。塾にも行けない。習い事もさせたかったが、我慢をさせてきた。服だって、食べ物だって、贅沢はできないし、遊びに連れていくことも頻繁にはできない。

ああ、でも、わたしはお金目当てなんかじゃないわ！

それとも、梨花のためにお金が必要だと思ふことは、すでにお金目当てということになるのだろうか。自分のためではないけれども、結局は自分のためなのかもしれないと思う。梨花の幸せは、沙耶の幸せだからだ。

「どうやら金はいるようだな」

佳貴は沙耶の表情を読んだように言い、口元に歪んだ笑みを浮かべた。

「わたしには小学生の妹がいるから……」

その途端、佳貴は驚いたように目を見開いた。

「妹がいるなんて話は聞いたことがないぞー」

「妹はいます。ただ、母の子ではないんですけど」

探偵が調べたのなら、どうして梨花がいることを知らせていないのだろう。それは不

思議だった。誰がどう調べても、梨花は赤ん坊の頃からずっと我が家にいる。

「お母さんの子ではないのか？ つまり……」

「その……異母妹です」

まさか父が浮気をしてできた子供とは言いたくない。父のことはどうでもいいが、梨花のことをそんなふうに変えてきた子供のように表現したくなかった。

「なるほど。だが、妹がいたとしても、君が金に執着していることには変わりはないわけだ」

佳貴は断定口調で言った。

本当に必要なお金ではなかった。祖父が生きていたら、親戚として頼りたかったが、それは単なるお金の問題ではないのだ。

梨花のために、そして、二年前までは母のためにも、沙耶は懸命に働いてきた。けれども、ほんの少しでも苦勞を誰かと分け合いたいと思ってしまう。

精神的に、誰か頼れる人が、自分には必要だった。

もちろん、祖父にそれを求めるのは、あまりに虫がよすぎるとは思っていた。そう……やはり、母が病に倒れたときに、連絡すべきだったのだ。そうすれば、こんなふうに戻れることはなかっただろう。

しかし、母の拒絶を超えるだけの、勇気が自分にはなかった。祖父が両親を罵倒して、

二度と帰ってくるなど言ったように、自分も同じようにはねつけられるかもしれないと思つたからだ。

まさか、祖父がこんなふうに関心してくれてたなんて……

母に知らせてあげたかつた。母は父親に憎まれていると思つたまま、この世を去つたのだ。

そう思うと、後悔だけが押し寄せてくる。なにもかもが遅かつた。母が死んだ後でも、もう少し早くここに来ていればよかつた。そうすれば、生きていた祖父と対面できたのに。沙耶は祖父の顔も知らないことに、今、気づいた。なにもかも遅すぎたとしても、せめて最後の義理は通そう。

顔を上げて、息を吸い込んだ。佳貴は威圧的で、沙耶にはとても怖く思えた。

「お祖父さんにお線香を上げたいんですけど」

佳貴は唇を歪めて笑つた。

「それを、いつ君が言い出すのか待つていたところだよ」

沙耶の心は傷ついたが、そう言われても仕方がない。彼は祖父のことで何度も連絡したと言っているが、沙耶はそんな連絡など受け取っていない。彼にそれを証明できない以上、それこそ卑劣な女だという印象は拭えないのだろう。

広い和室に案内された。大きな仏壇の横に祭壇が設けられている。白い布がかけられ、

そこには祖父の写真と位牌いはい、そして遺骨が置かれていた。

亡くなって、一週間。つまり、納骨もまだなのね……

自分は本当に祖父が亡くなってすぐに、のこのこ現れたのだ。遺産目当てのように思われても仕方がない。

沙耶は祭壇の前に置かれた座布団に座り、祖父の写真をじつと見つめた。頑固そうな顔つきをしているが、どこか母と似ていた。

沙耶は線香を上げると、手を合わせた。

「ごめんさい、お祖父さん。一度も会いにこなくて……お母さんの病気を知らせなくて、ごめんさい。」

いくら謝つても、許されないのはわかつている。けれども、謝ることしかできなかった。「まるで、君が改心したように見えるよ。演技が上手いんだな」

後ろから佳貴に声をかけられて、沙耶は胸がずきんと痛んだ。

彼にとつては、このままずっと自分は金目当ての卑劣な女のままなのだろう。そう思うと、悲しかった。

彼とは血縁関係はないが、それでも戸籍上は沙耶の叔父ということになる。父にも母にも他に兄弟がいなかつたから、自分にとって一番近い親族なのだ。その大事な相手に、こんなに嫌われてしまった以上、沙耶はもうここにはいたくなくかつた。

「わたし……帰ります。すみませんでした……」  
座布団から下りて、佳貴に向き直ると、頭を下げた。佳貴は軽蔑しきった表情を崩しはしなかった。

「帰る前に書齋で話そう。君が喜びそうな話があるんだ。お祖父さんの遺産のことで」  
もう、これ以上の侮辱は受けたくない。梨花のためにお金は欲しいが、一度も会ったことのない祖父の遺産を受け取ることではできなかった。それは養子である佳貴に権利がある。

宮瀬ホールディングスなんて会社のことはよく知らないが、彼がそのCEOだということは、きっと祖父の会社の後継者でもあるということなのだろう。だとしたら、やはり遺産は彼のものだ。

「いいえ、もういいんです。わたし、お祖父さんに会いたかったですから。……失礼します」

沙耶は立ち上がると、佳貴の返事を待たずに、玄関へと向かった。佳貴は追いかけてはこなかった。当然だろう。彼は自分を追い出したくて、たまらなかつたはずだから。靴を履いていると、佳貴の代わりにお手伝いの女性がやってきて、見送ってくれた。沙耶が出ていけるように、門扉が開いている。まるで、おまえなんかさっさと出ていけと言われているようでもあった。

こんなところに来るんじゃないな……

いや、違う。来たからこそ、自分にはもう誰も頼れないことがわかったのだ。今までどおり、梨花はわたしが守らなくてはならない。それだけのことだ。

沙耶は涙が出そうになるのを抑えて、足早に駅へと向かった。  
今日は最悪の休日だった。

沙耶は早くアパートに帰りたいかった。頼みの綱の祖父がすでに亡くなっていたことや、それに次ぐ後悔、そしてなによりも佳貴の非難がこたえていた。

帰る途中、近所のスーパーで食料品を買った。落ち込んでいる気分を手取り早く解消するには買い物が一番というが、無駄なことにお金を使う余裕はないので、食料品を買ったのだ。どうせ必要なものだ。それに、今日は少し豪華な食事にしよう。沙耶はトシカツ用の肉を買い込み、これで傷ついた心が癒せますようにと祈った。

沙耶が住んでいるのは公営アパートの二階だった。今日は天気がよかったから、朝干した洗濯物はもう乾いているだろうか。そんなことを考えながら、階段を上がろうとして、そこにいる人物に気づき、ギョツとした。

「沙耶……久しぶりだな」

そこにいたのは、沙耶の父だった。だらしなない服装にくたびれた顔。とりあえず、今

日は素面しらふのようだったが、まともな生活をしているとは思えない。父と顔を合わせたのは一体、何年ぶりだろうか。沙耶は過去のことを思い出して、顔をしかめた。

赤ん坊だった梨花を抱いた若い女性が押しかけてきたのは、沙耶が十二歳のときだった。もう中学に通っていた頃だ。女性は父の子だと言って、梨花を沙耶に押しつけて、帰ってしまった。突然、現れた腹違いの妹に、沙耶はどうしたらいいのかわからなかった。父はあっさり梨花が自分の子だと認めた。母は浮気されていたことを知り、傷ついたが、父の子だと思うと、見捨てられなかった。それに、梨花はとても可愛い赤ん坊だったのだ。あの女性が梨花を捨てていったことが、沙耶は不思議でならなかった。

梨花は女性の戸籍に入っていて、認知もされていなかった。母は父を説得して、梨花を我が家の養女にした。そして、いびつだけれど、四人家族として生活を始めようとした矢先、父は行方をくらしめたのだ。

あれ以来、こんなふうには、父はたまたまにふらりと家に来てきた。が、家にお金を入れるわけでもなく、母にさんざん酒代を払わせた挙句に、またふらりと出ていった。その繰り返しで、最後に来たのが母の葬儀ひなのときだった。

沙耶はあのことの思い出し、唇くちびるを噛んだ。

「お父さん……よくものうのうと顔を出せたものね！」

葬儀のときにやってきて、父は香典を盗んでいったのだ。それだけならまだいい。梨花に本当のことを喋しゃべってしまったのだ。母の子ではないことを。

梨花は両親の子供だと信じきっていたのに。

「お父さんはひどい人よ！ 梨花にわざわざあんなことを……」

「ひどいこと？ それなら、梨花は実の母を知らないままでよかったって言うのかい？」  
呑気のんきな口調で尋ねられて、沙耶は怯ひるんだ。確かに梨花には実の母親がいるのだ。あの女性ひとだつて、今頃、梨花を捨てたことを後悔くわいしていいとも限らない。それなのに、真実を告げないのは、正しいことだろうか。

「でも……梨花はまだ八歳だったわ」

母が死んだだけでもショックだったのに、その母が本当の母ではなかったなんて知らされて、どれだけ苦しんだらう。あのとき、沙耶は呆然とする梨花を抱き締めて、泣いた。そして、彼女に何度も何度も囁ささやいた。

『お姉ちゃんがお母さんの代わりになるから』と……

そんな騒さわぎを起おこした張本人は、香典を持って逃げたのだ。いっそ警察に通報しようかと思っただけだ。

「もちろん……悪かったと思っっている。香典のことも。どうして、あんなことをしてしまったんだか……。あれから後悔くわいしたんだ。だから、ここ二年は、家には寄りつけなかった」

「当たり前よ。妻の香典を盗む夫がいるもんですか。恥じ入って、一生、顔を出さないのが当然なんじゃないの？」

沙耶は父に対しては辛辣だった。母と駆け落ちまでしておいて、結局、母を幸せにできなかった男だ。それどころか、死に追いやったと言ってもいい。

画家を目指していたという父は、家にいたときもあまり真面目に働いているとは言いがたかったし、沙耶が物心ついたときから母はずっと働いていたのだ。母に苦勞を押しつけているうちに、挫折した父はあるときから酒に逃げてしまった。もちろん、父が行方をくらませてから、母はもっと苦勞したはずだ。

「そう言うなよ、沙耶。梨花に会いたいんだ。あの子の顔が見たい。会ったら、すぐに帰るから。なあ、頼む！」

くたびれた父親が娘に頭を下げている。沙耶はとうにこの男を父親だとは思っていないが、それでも彼が戸籍上でも血縁上でも父親であることに変わりはない。こんな格好をしているのだから、きつとろくに金も持っていないのだろう。それどころか、住む所がなくても、おかしくない。

やはり、自分の父親を見捨てられるはずがなかった。

こんな男でも、優しかったことはある。絵筆を握り、幼い沙耶を愛情込めて描いてくれたこともある。もう、そんな絵も、本人が処分してしまつて、一枚も残っていないが。

沙耶はため息をついた。

「……わかった。一晩くらいは、うちにいてもいいわよ」

「ありがとう！ さすが俺の娘だ」

そう言われても、ありがたくもなんともない。いつそ縁が切れたらいいのに。沙耶はそう思いながら、バッグから鍵を出してドアを開けた。

梨花は久しぶりに父親に会えて、屈託なく大喜びをしていた。

それは、もちろん彼が香典を盗んでいったことを、梨花には知らせていないからだ。葬式に来てくれたのは母の勤め先の人や近所の人、それから沙耶の勤め先の人やごく親しい友人くらいで、香典自体はものすごい大金というわけではなかった。しかし、そんなお金を盗んでいった父のことは、どうしたって許せるはずがない。

けれども、学校から帰ってきた梨花が父に飛びついて、喜びを全身で表しているのを見ると、なんだか自分が悪者になったような気がしてしまふ。

「ねえ、お父さん、これからずっと家にいるよね？ もう出ていったりしないよね？」

そんなわけはない。梨花だつて知っているはずだ。父は家に居着かず、いつもふらふらと出ていくのだ。

「ああ。お姉ちゃんがいいと言ってくれたら、いつまでもいるよ」

父がそんなふうに答えているのを聞いて、沙耶はキッチンで包丁を取り落とすところだった。

まさか、そんなことを言い出すとは思わなかった。いや、どうせ出ていくに決まっている。今までだつてそうだった。梨花に期待を持たせたくない一心で、沙耶は声をかけた。「どうせ、お父さんはまたいなくなるに決まってる。梨花、喜ぶのは、お父さんがここでちゃんと仕事を見つけてからにしたほうがいいと思うわ」

仕事を見つけたとしても、父はいつもすぐに辞めてしまうのだ。どうして母がこんな男と駆け落ちまでして結婚したかったのか、沙耶にはさっぱりわからない。

いや、父にはただひとつ長所があった。口が上手いという長所だ。きつと母は騙だまされたに違いない。画家を志す青年に、薔薇色の未来を見てしまったのだろう。彼にすべてを捧げ尽くしても構わないと思うほどに。

「じゃあ、沙耶は俺がここにいってもいいんだな？ 梨花、よかつたな。ずつとおまえと一緒にいられるぞ」

沙耶の言葉を自分の都合のいいように捻じ曲げている。沙耶はうんざりしたが、梨花は父の言うことを聞いて、すでに喜んでいて。

「やつたー！ お父さん、ずつといてね。約束だよ！」

いずれ梨花が悲しむことになるのは確実だが、今はそつとしておこう。沙耶はそれよ

り勝手なことを言つて、自分と梨花の世界をかき乱す父が憎かつた。香典泥棒のことは、梨花には言わなかつたが、いつそ言つてしまえばよかつたのかもしれない。こんなに腹立たしい思いをするくらいなら。

梨花はほとんど父親のことを知らない。そう思うと、不憫に思う気持ちもある。たとえ一時でも、父親と一緒にいられることが、梨花の喜びならば、香典のことは頭の隅に押しやつてもいい。

もつとも、お金の管理だけはしておこう。大した貯金はないが、それを盗まれてしまったら、自分たちの生活が滅茶苦茶になる。いくら香典を盗むような男でも、そこまではしないとと思うが。親としての責任を放棄している上に、自分の娘達を一文無しにしたいとは考えていないだろう。

沙耶は厳しい声で父に忠告した。

「ここにいたいなら、お酒はやめてね。それから、絶対に仕事を探して、真面目に働いて。わたしのお給料だけじゃ、三人も暮らせないんだから」

今だつてぎりぎりの生活だ。わずかな貯金ができるくらいの稼ぎしかない。なにかあつたときのために、貯金は崩したくないから、やはり父の面倒まではみられないのだ。

「ああ、わかっているよ。娘の世話になりたいわけじゃないんだ。俺だつて、もう歳をとつて、落ち着きたいんだよ。淋しくなつちまつてさ……おまえ達と暮らしたいんだ」

父は目をしばたいた。今までどこでなにをやっていたのか知らないが、確かに長年の放浪生活がたたったのか、ずいぶん老けてしまっている。家族のことが急に恋しくなってきた。仕方がないような気がしてきた。

父のことを追い出したいと思っていた沙耶も、情にほだされそうになる。

信用してはいけないと思うのに、やはり自分の父親だと思うと、あまり冷たい態度も取れない。

「わかったわ……。わたしは約束さえ守ってくれば、もう文句は言わない」

「ありがとう！ 沙耶、おまえは素晴らしい孝行娘だよ！」

結局は父の思いどおりになってしまっている。それはわかっていたが、沙耶は少し様子を見ていいだろうとも思った。

貯金通帳はちゃんと隠した。それに、暗証番号なんて父にはわからないはずだ。念のため、印鑑はバッグに入れて、持ち歩いていなければならないが、いざというときのために備えだけはしておくべきだろう。口座にあるお金を全部失ったら、すぐに生活ができなくなるのだから。

沙耶は用心だけはしておこうと、固く心に決めた。

## 3

それから三日が過ぎた。

父は今のところ仕事を探しているようだが、まだ決まっていはいない。だが、梨花にはいい父親ぶりを発揮していて、それだけはよかったと思う。

沙耶はいつものように朝食を作り、仕事のためにアパートを出た。今日は日曜で、梨花は家にいる。二人きりにしても大丈夫なのかと思ったが、仕方ない。梨花は父のことを全面的に信頼しているのに、自分はこれほど警戒心を抱いている。梨花のように、父を家族の一員だと思えばいいのだが、やはり今はまだ無理だった。

沙耶は自分の職場であるムラサキ堂に着くと、更衣室で制服に着替えた。そして、名札を胸につける。ロッカーの扉の内側には鏡が取りつけられている。それを見ながら、長い髪をうしろでまとめて、乱れがないようにした。接客業において、身だしなみはなにより大事だからだ。

メイクは控えめにしているが、それでも素顔でいるよりずっと大人びて見える。沙耶は服装にも乱れがないか、ちゃんとチェックしてから、二階の婦人服売り場に向かった。



日曜日は平日より客が増える。沙耶は、ずっとレジを担当していた。この売り場で仕事するのも、もう二年になる。ここで扱う婦人服についても詳しくなっていて、後輩に頼られる存在にもなっていた。

母が病と闘っているときは、病院とアパートを行き来していて、仕事も大変に思っていたが、今はけっこう楽しんでやっている。梨花も、今では一人きりで留守番させておいても、それほど心配がない。

父のことだけは心配だが……。父が本当に頼りになるのなら、自分ももっと楽になれる。祖父に会いにいったら、あんなに嫌な思いをすることもなかったのだ。

ふと、沙耶はあのとくに会った男のことを思い出していた。

宮瀬佳貴……。あんな出会いでなかったなら、自分は彼に夢中になっていたかもしれない。そんなことを考えてしまい、沙耶は慌ててその考えを打ち消した。

わたししたら、仕事中に、なんてことを考えているのかしら。

こんなに気が緩んでいるところを主任に見つかつたら、きっと注意されるだろう。そんなことを考えているうちに、気難しい顔をした三十代の女性主任がレジのスペースの中へと入ってきて、沙耶に耳打ちした。

「応接室にお客様がいらしているわ。ここはいいから、早く行って」

「わたしにお客さん……ですか？」

誰が訪ねてくるというのだろう。しかも、仕事場なんかには。

沙耶は呆然としたが、主任に睨まれて、慌てて頭を下げた。

「すみません。よろしくお願ひします」

レジを主任に任せて、さっと応接室へと向かう。グズグズしていたら、後でまた叱責されるに決まっている。ポータスの査定に響くと困るので、そそくさとバックヤードの狭い通路に入り、応接室へと向かった。

今まで、応接室なんて入ったこともない。仕事中に客が来たことなんてないからだ。

ノックして、ドアを開けると、一人のスーツ姿の男性がソファに腰掛けていた。

「あなた……どうしてここに？」

沙耶は驚いた。そこにいたのは、宮瀬佳貴だったからだ。ほぼ喧嘩別れのような去り方をしたのに、彼はどうしてここへやってきたのだろう。

まだ沙耶を侮辱し足りなかったのか。あのとこのことを思い出して、沙耶は思わず唇を噛み締めた。

佳貴のほうはというと、相変わらず傲慢そうな顔をこちらに向けている。

「君のことは調べさせてもらった。アパートで父親と腹違いの妹と暮らしている。職場はここ、ムラサキ堂だ」

彼のようなお金持ちは、探偵でも雇って調べさせたのだろう。だが、以前にも調べさ

せていたのではなかったのだろうか。今さら、なにを言っているのかと、沙耶は思った。「なんのために、わざわざわたしの職場にいらしたんですか？」

せめて、アパートのほうに訪ねてくれればいい。職場に訪ねてくるなんて、勝手すぎる。「もちろん、理由があつて来た。だが、ここでは話せない。これから一緒に来てくれ」

彼は当然、沙耶が自分の言葉に従うものと決めてかかっているようだった。本当にどこまで偉そうなのだろうか、彼は。

「……どこに？」

「どこでもいい。プライベートな話ができる場所だ。すぐに着替えてきたまえ」

彼の居丈高な命令にかちんとくる。彼は別に沙耶の上司ではない。こんなふうに命令される覚えはなかった。

「わたしはまだ仕事がありますから」

「君はこれから早退すると、すでに上のほうには話をつけてある」

沙耶は再び呆然とした。なんて勝手な人なんだろう。そう思わずにはいられない。

確か、彼は宮瀬ホールディングスのCEOだということだった。あの屋敷の大きさをかためて、きつと大きな会社なのだろう。きつと金も権力も持っているに違いない。しかし、彼に雇われているわけでもない自分が、こんなふうに彼の思いどおりに動かされるのは我慢がならなかった。

沙耶は元々おとなしい性格だが、こういう理不尽なことをされると、やはり怒りたくなってくる。

「お言葉ですが、わたしのほうはあなたに話なんてありません」

「遺産についてだ。君にも権利がある。……興味あるだろう？」

決めつけられるのは悔しかったが、遺産と聞いて無視はできない。自分ではなく、梨花のために。あの屋敷にいたときには、祖父が亡くなっていたことや、金目当てだと思われたこともあつて、遺産などいらないと思つたが、やはりそれは理性的な考えとは言えなかった。

顔も知らない祖父の遺産をもらおうなんて、図々しいとは思つたが、佳貴にはどうせそういう女だと思われているなら、梨花のために、もらえるものはもらっておきたい。

しかし、佳貴に訳知り顔をされるのは、やはり屈辱的だ。沙耶は視線を逸らして言った。「わかりました。着替えてきます」

沙耶の言葉に、佳貴はふっと笑った。いかにも馬鹿にしたような笑い方だったが、実際、祖父の遺産が欲しいのだから、馬鹿にされても仕方がないだろう。

「なるべく早くしてくれ。待たされるのは好きじゃない」

ええ、そうでしょうとも！

沙耶は心の中で悪態をついた。更衣室で手早く着替えると、再び応接室に向かう。ド

アを開けようとしたところで、内側から開いた。目の前に佳貴が立っていて、なぜだか沙耶はドキツとする。彼と自分の身長差に、一瞬だけ自分が彼に守られる存在になったような気がしたからだ。

もちろん、これは単なる気のせいだ。佳貴は守ってくれたりしない。罵倒ばとうしたり、侮辱するのは得意なようだったが。

「行こう。駐車場に車を待たせている」

つまり、彼は運転手つきの車を待たせているということなのだ。ごく一般の庶民ならしないことだ。そもそも、彼にはこんなスーパールの応接室は似合わない。そして、スーパールの販売員である自分とも。

バックヤードから、そのまま外に出るべきだったが、佳貴がさっさと店内のほうに出てしまったので、沙耶は後を追った。彼は広い場所に出るなり、沙耶の肩に手をかけ、まるで恋人のような仕草をした。沙耶は驚いて、肩をビクツと震わせた。しかし、佳貴は平然としている。

こんな親しげな行動をとられる意味がわからない。ここは沙耶の職場だ。同僚や先輩、後輩に見られて、変な噂を立てられるのは嫌だ。

「あの……肩に手をかけるの、やめてもらえませんか？」

沙耶は思いついて言ってみた。さすがに、振り払うのは失礼だと思うからだ。

「なぜ？」

「だって、誰かに見られたら、わたしが困りますから。あれは誰なのって、明日には質問攻めにされてしまいます。わたしの恋人みたいに思われてしまいますよ」

「私が君の恋人？ 馬鹿馬鹿しい」

そう言いながらも、佳貴は沙耶から手を離さない。

「それが嫌なら、離してください」

「君に指図されるのが気に食わないんだ」

そんな理由で、彼が意地を張るなら、さっさと手を振り払ってしまえばよかった。彼は驚くほど傲慢ごうまんな上、とても頑固なのだろう。

「それに、もう君が……」

佳貴はなにか言い足そうとして、途中でやめて口を閉じた。そんなことをされると、続きが気になるのに。彼は一体、なにを言おうとしていたのだろうか。

「はっきり言ってください」

「だから、君に指図されるのは、我慢がならない。黙って、私に従ってもらいたい」

「もし嫌だと言ったら……？」

「君もしつこいな。黙って従えと言っただろう？ 金が欲しいなら、そうするんだ」  
居丈高いだけだかに命令をされて、沙耶はうんざりした。こんな男の言いなりになって、どうし

て自分の職場から連れ出されなければならないのだろう。しかも、こんな恋人のような親密そうなポーズで。

まったく、わけがわからない。

とにかく、もう一刻も早く、店の外に出てしまいたかった。足早に移動すると、同じ速さで佳貴もついてくる。まるで二人で競うように歩き、やっと外に出た。

「あなたの車は？」

「ここで待ってればいい」

佳貴が携帯を取り出し、電話をかけた。すると、程なく黒塗りの高級車がさっと二人の前に停まる。すぐにそこに乗り込むのかと思えば、わざわざ運転手が降りてきて、恭しく後部座席のドアを開けた。

まるでセレブみたいね！

沙耶はそう思ったが、実際、彼はセレブと言えるだろう。大企業のトップにいるのだから。

佳貴はさっさと乗り込み、奥のほうに座った。沙耶は恐縮しながら運転手に頭を下げ、佳貴の隣に座る。広い車内ではあるが、こうして隣同士に座ると、やはり親密な感じが出てきて、なんとも言えない気分になる。

だって、わたしと彼はそんな関係ではないんだもの。

どちらかといえば、憎み合っていると聞いたほうが正しい。いや、沙耶は別に佳貴を憎んでいるわけではない。ただ、純粹に嫌いなだけだ。

運転手が自分の席に戻ると、車が動き始めた。

「これから……どこに行くの？」

沙耶が質問すると、佳貴はうんざりとしたように言った。

「だから、黙っていると言っただろう？ だいたい、どうして、いちいち反抗するんだ？ そんな性格をしているのに、よく接客業なんて勤まるな？」

余計なお世話だ。佳貴には一言言わずにはいられなくなるのが、自分でも不思議だったが、他の人にはそうでもないと思う。もちろんお客様には愛想がいい。上司や先輩には口答えをしたこともない。自分で言うのもなんだが、優良社員なのだ。

「わたしは販売のプロですから、お客様にはこんな態度は取りません。あなたが無礼だから、それなりの態度を取っているだけです」

「金の亡者のくせに、よく言うな」

彼の軽蔑した口調が、胸に突き刺さる。傷つきたくないが、こんなふうにし様に言われて、傷つかないはずがない。

「あなたこそ、職場でいつもそんなに口が悪いんですか？」

「いや……。君にだけ特別だよ」

彼は笑いながら言ったが、そんな特別はありがたくもなかった。

やがて、車はマンシヨンのエントランスの前に停まった。彼が好みそうなタワー型のマンシヨンだが、ここに住んでいるのだろうか。てつきり、彼の住まいはあの屋敷だと思っていたのに。

運転手がドアを開けてくれて、やっと外に出ることができた。佳貴と狭い空間に一緒にいると、親密な雰囲気は漂ってしまつて、どうしようもなかったから、ほっとする。

「さあ、行こう」

佳貴は沙耶の肩に手をかけた。なんでも指示したがるのに、自分は指図されるのが嫌だなんて、相だな我がままだ。

「ここは、あなたが住んでいるところなんですか？」

「そうであり、違うとも言える。本当の住まいは君が訪ねてきたあの家だ。ここは仕事に忙しいときにホテル代わりに泊まつたり、人をもてなすときに使っている」

きつと、会社名義の部屋なのだろう。とはいえ、彼の住まいでなくてよかつた。沙耶は今まで男性の一人暮らしの部屋に入つたことなど、一度もないからだ。もちろん、二人は恋人同士でもなんでもないのだから、そこまで気を回すことはないだろうが、それでもなんとなく意識してしまう。

二人きりには違いないが、仕事上のもてなしの場合だと思えば、そこまで緊張するほどのことはないはずだ。

目的の部屋は、最上階のペントハウスだつた。たぶんそうだろうと、沙耶が睨んだとおりだつた。そんな勘が当たつたところで、どうしようもないが。

部屋に入ると、広々としたリビングに驚いた。窓は大きく開放的で、眺めがいい。白いソファは座り心地がよくて、沙耶はなんとなく気分がよくなつてしまつた。

だつて、まるでインテリア雑誌から抜け出したような綺麗な部屋なんだもの。

こんな部屋に住むのは、沙耶の小さいときからの憧れだつた。お金がないために、到底、実現しそうにないが、今も夢見ている。いつか自分もお金を貯めて、オシャレなインテリアの部屋に住むのだと。

「飲み物は？ といつても、酒くらいしかないが」

佳貴に尋ねられて、沙耶は顔をしかめた。まだ日も落ちてないのに、酒を飲むなんて、とんでもない。

「コーヒーとかないんですか？」

「ないことはないが……」

彼はきつとコーヒーを自分で淹れたことがないに違いない。誰かをもてなすときには、彼のスタッフが淹れてくれるのだろう。沙耶はきつと立ち上がつて、キッチンへと向かつ

た。探すと、すぐにコーヒーメーカーが見つかる。もちろんコーヒー豆も。

「わたしが淹れますから。……あなたは？」

「では、私の分も」

「了解」

沙耶はさっさとコーヒーメーカーをセットした。そして、食器棚から勝手にコーヒーカップを二組、取り出す。

「君は意外とてきぱきしているんだな」

彼はどういう目で自分を見ていたのだろうか。金目当てだかなんだか知らないが、普通に生活していれば、コーヒーくらい淹れられるに決まっている。

「長い間、母の代わりで家事をしていましたから。妹の面倒も見なくてはいけないし」

沙耶は子供の頃からずっとそんな生活をしなければならなかった。だが、一番可哀想なのは母だ。あの父に騙されて駆け落ちしたばかりに、実家との縁が切れたばかりではなく、貧しい生活を強いられ、働きどおしだった。

いっそ離婚していれば、楽だったかもしれない。母子家庭ということで、公的援助も受けられただろう。

それなのに……

父を信じていた母が、たまに憎くなる時がある。とはいえ、沙耶もまた梨花のため

に、父がアパートに居候いこうしていることを許している。どうせいなくなるに決まっていると思うからだが、沙耶にしてみれば、いっそいなほうが助かる父親なのだ。

コーヒーをリビングに運んで、テーブルの上に置いた。まるで自分が彼をもてなしているようで、なんだか変な気分だった。

向かい合って座ると、佳貴はまるで自分を値踏みするかのように見つめてくる。どうせ金目当てだとか、そういうことを考えているに違いない。

彼は高級そうな仕立てのスーツを着ていて、自分はムラサキ堂で買った安い服を身につけている。なんてことはないカットソーとスカート姿で、流行のものでさえない。そんな違いを感じるだけで、自分が惨めに思えてきてしまう。

「さあ、さっさと話をしてください」

彼の視線に耐えられず、沙耶が促すと、佳貴は嫌な顔をした。

「そんなに金のことが大事か？」

度重なる彼の侮辱おごりに、沙耶はきつと唇を引き結んだ。この男には何を言っても同じだ。しかし、祖父が死ぬまで、会いにいかなかったのは事実なのだ。そのことが、沙耶の心にはまだ重くのしかかっていた。

母が死ぬ前に、会いにいけばよかったのに……

しかし、今さら悔やんでも遅すぎる。二人が天国で和解したと思うことにしよう。そ

うとも思わないことには、良心の呵責に押し潰されそうだった。

「まあいい。私だって、君とコーヒーを飲むために、ここに来たわけじゃないんだ。さつさと話を済ませてしまおう」

彼は傍らに置いていたブリーフケースから、書類を取り出した。数枚のコピー用紙をクリップで留めたものようだった。

「これは、君のお祖父さんの遺言のコピーだ」

渡されたものを受け取り、沙耶が読もうとしたところ、彼はそれを遮るように言った。「結論から言うと、君と私は結婚しなければならぬらしい」

結婚……？

今、結婚と聞こえたような気がしたけど……？

でも、聞き間違いよね。どうしてこの人とわたしが結婚なんかしくちやいけないのよ。今日で会ったのは二度目なのに。

沙耶は顔を上げて、佳貴の顔を見つめて、首をかしげた。彼の眼差しは冷たく、沙耶に対して、怒っているように見える。

「あの……今、なんて？」

聞き返してはまずいだろうかと思いつつ、尋ねてみた。

佳貴は目を伏せ、ため息をついた。そして、次に目を上げたときは、なにか決意を胸

に秘めたような表情になっていた。

「君は私と結婚しなければ、遺産をもらえないということだ」

沙耶は呆然として、佳貴の顔を見つめた。

「ど……どういうこと？」

結婚なんて、今まで一度も考えたことがない。まして、こんな男と結婚なんて、あり得ない。向こうだって、間違いなくそう思っているに違いなかった。だから、こんな怒ったような顔をしているのだ。

「読んでもらえばわかるが、養父の屋敷とあの土地以外の財産はすべて私が相続する。君がもし私と結婚すれば、あの屋敷と土地の権利がそれぞれ半分、君のものになる」

「半分だけ？ もう半分は……」

「私のものだ。もし養父の死後、三カ月の間に、君と私が結婚しないのなら、あの屋敷と土地は養父の甥のものになる。もちろん、私はあの屋敷と土地が欲しい。自分が育つた思い出の場所だから」

しかし、半分だけしか、祖父は彼に残さなかった。しかも、条件つきなのだ。

「でも、そんな遺言は許されるの？ 結婚を条件にするなんて……」

今まで聞いたこともない話だ。それに、遺言は絶対ではないはずだ。確か、遺言が優先されるにしても、法律で認められている相続分というものがあつたと思う。

とにかく、わたしのことを金の亡者だつて非難する人と、結婚なんてしないわ！  
 沙耶は佳貴を睨みつけた。しかし、佳貴は沙耶の表情をあまり気にしないようだった。  
 「結婚しなくても、君は遺留分を請求できるだろう。だが、あの屋敷と土地はあの男の  
 ものになる。それは、私としては絶対に避けたいことだ」

「じゃあ、その人からあなたが買い取ればいいんじゃない？ 財産のほとんどはあなたの  
 ものなんでしょう？」  
 佳貴は眉をひそめた。

「そうだ。それが問題だ。彼は養子の私が遺産のほとんどを相続することを、あまり快  
 く思っていない。屋敷と土地を欲しがれば、法外な値段で買い戻せと言うだろうな」

それが本当なら、なんて嫌な男だろう。祖父の養子と孫娘が生きているのに、遺産を  
 もらいたがっているなんて、ずいぶん強欲だ。

もちろん、単に佳貴のことが嫌いだということも考えられる。少なくとも、沙耶はそ  
 うだ。

けれど、彼は祖父の息子となり、ずっと祖父を支え続けていたに違いない。だとすれ  
 ば、彼が遺産のほとんどをもらえるということには納得できる。それに、沙耶は自分の  
 ために祖父の遺産が欲しいわけではない。梨花のために、少額でもいいから欲しいのだ。  
 彼女の将来のために、少しでも貯金を増やしておきかたつた。

「あの……わたしには条件つきの屋敷と土地の半分の権利しか残されていないんです  
 か？」

躊躇いつつも、尋ねてみた。すると、いかにも軽蔑けいべいしきつたような眼差しで、佳貴が  
 見つめてくる。確かに、自分でも浅ましいと思う。だが、これもすべて梨花のためだ。  
 自分のためではない。

必死で自分の心の中で言い訳をする。本当は目の前の男に言いたいのだが、彼はきつ  
 とそんなことを信じてくれそうになかったからだ。

「そこに書いてあるとおり……現金二千万円が残されている」  
 「二千万！」

沙耶の声は上擦った。自分にとっては途方もない額だ。相続税を払わなくてはならな  
 いだろうが、それでも手元にたくさん残るに違いない。

「ただし、それも私と結婚すればの話だ。結婚しなければ、私のものとなる」

沙耶はがっかりした。祖父はどうしても孫娘と養子を結婚させたかったようだ。こん  
 な迷惑な遺言を残すなんて、一体、祖父はどんな人だったのだろうか。

いや、それはずいぶん勝手な考え方だ。この遺言に一番ショックを受けたのは、やは  
 り佳貴だろう。会ったこともない戸籍上の姪と遺産を分け合わなければならぬだけで  
 も、彼にとつては腹が立つことだろうに、結婚までしなくてはいけぬのだ。



「私は私自身の財産というものをすでに持っている。だが、あの屋敷だけはどうしても欲しい。手に入れたいんだ」

佳貴の声は熱を帯びていた。どうやら、彼が一番欲しいものこそが、あの屋敷だったのだ。祖父はそのことを知っていて、こんな条件をつけたのだろう。

「それじゃ、籍だけ入れる……というの？」

沙耶は恐る恐る切り出した。それを聞いた佳貴は、顔を強張らせて、首を振った。

「結婚して、三年間は屋敷に同居すること、と書いてある。つまり、養父が望んでいたのは、私と君が結婚し、宮瀬家の血を継ぐ跡取りを残すことなんだ」

彼の自嘲めいた言葉に、沙耶ははっとした。祖父は養子を迎えながら、自分の血を継ぐ跡取りを産ませるために、孫娘と結婚させようとしていたのだ。

それでは……彼が怒るのも無理はないわ。

祖父がどんな人間だったのか、実際に会っていないから知らないが、佳貴が可哀想な気がしてきた。いや、彼もきっと同情されたくないと思うが。わたしが祖父と会わなかったことを、あれだけ非難してきたのだから、きっと彼は養父のことを慕っていたはずだ。それなのに、孫娘と結婚しなければ、彼が一番欲しがっているものをあげないなんて、ひどいと思う。

それにしても、跡取りだなんて……

佳貴と結婚したら、どんな生活を送ることになるのだろうか、沙耶は一瞬だけ考えってしまった。彼が赤ん坊を抱いているところが頭に浮かんで、そんなことを想像した自分が怖かった。

結婚なんて、とんでもないことなのに！

佳貴は沙耶の顔に視線を据えながら、ゆっくりと言った。

「だから……私は君と結婚しようと思う」

それって、プロポーズ……のわけはないわね。

尋ねているのではなく、勝手に彼が決めているだけのことだ。しかも、沙耶が断らないと思っっている。なんて傲慢で偉そうな男なのだろう。

「わたしはしたくないわ！」

すぐにはねつけて、沙耶は一瞬だけ爽快感を味わった。だが、佳貴の怒りに満ちた瞳を見て、瞬時に後悔する。

「君が承諾しないと、屋敷も土地も、なんの愛着も持たない男のものになる。あの屋敷は、君のお母さんの育ったところでもあるんだぞ」

そう言われて、沙耶は怯んだ。母が育ったところだと思つくと、大して知らない屋敷になにか特別なものがあるような気がしてきた。

「でも、そのために、あなたと結婚するなんて……。あなただって、嫌なんでしょう？」

「もちろんだ」

即座に答えが返ってきて、沙耶はムツとする。しかし、自分も同じようなことを言ったのだ。非難する資格はないだろう。

「だが、それが養父の望みなら、結婚して子供をつくるつもりだ」

「こ、子供なんて……」

沙耶は頬を赤らめた。子供をつくるためには、ただ一緒に暮らすだけではいけないということだ。彼は本気でそんなことを考えているのだろうか。

「無理よ……そんな……」

「別に無理ではないだろう」

素っ気なく言われて、ますます沙耶は狼狽した。佳貴が平然としていることが信じられない。さつき、彼はなにを考えて、こちらを見て値踏みしていたのだろうか。そう考えると、急にどこかに身を隠したくなってきた。

「どうせ、君は金目当てなんだろう？ 私と結婚すれば、一生、裕福に暮らせる。これ以上の望みはないはずだ」

そんなふうに関わりつけられて、沙耶はやはり気分を害した。彼は沙耶をそういう女だと思っ込んでいる。

「わたしは妹のためにお金が欲しいだけです！」

そう言ったものの、佳貴が信じていないのは明らかだった。馬鹿にしたような目つきで、こちらを見たからだ。

「それなら、妹さんにも裕福な暮らしをさせてやれる。君の小遣いから援助してやればいい」

「裕福な暮らしでなくてもいいんです。ただ……今のわたしでは、充分なこととはしてあげられないから、少し余裕が欲しいだけのこと……でも、こんな結婚なんてできません！」

「どんな結婚ならいいと言うんだ？」

自分を馬鹿にしている男と結婚なんてできない。しかも、子供ができるようなことを、彼とするなんて、とんでもない。そもそも、沙耶は好きな人と恋愛結婚がしたかった。

今まで結婚したいほど好きな男性なんていなかったが、少なくとも、こんな傲慢な相手でないことは確かだ。沙耶が好きなのは、自分を好きでいてくれて、優しくしてくれる男性だ。

「三年間、同居するのは構いません。あのお屋敷は広そうだし……。それだけの関係なら、たとえ籍を入れても……」

佳貴は沙耶の言葉を鼻で笑った。

「形だけの結婚というわけか。馬鹿にするな」